投稿

「西条は何も無い所か」論争について
―B教授の発言に寄せて―

理学部三年 ❖ 谷 光昭彦

前回の要旨

二十六期八号でA氏は「西条は何も無い所」と述べている。これは、新入生への呼び掛けの文章であるのに、A氏が新入生にむけ厳しい現実をオーバーに表現したのであろうが、学外に配られていることなどにより、A氏の実名をあげこのような強い調子で批判することに、私は一つの疑問をもたざるをえない。それは、A氏は広大生のもつ「無神経さ」を文章にしたために、スケープゴート・見せしめになってしまったのではあるまいか。

もちろん、B教授の反論はその要旨として、〝広大生にある西条への「無神経さ」の指摘と問題提起〟として私は一定の評価をしてはいる。

しかし、確かに「何もない」と感じるとはいっても、このことで、東広島市や市民に対して不満に思っているわけではなく、東広島市・市民の方々の努力に感謝しながら、感謝したうえで誤解を恐れず、私は「何もない」というのだ。

この「何もない」と思わせている責任がどこにあるのか。

西条に移ることで、「下宿代の高額化」「移動にかかる金銭的・肉体的・時間的負担」「金銭的に苦しいために、バイトをしようにも求人数が少ない」という事情をB教授はご存じであろうか。

我々学生は、大概四年間の期間しかこの広島大学にいないのであり、そうした立場をわきまえて、大学当局者としても一教授としても、学生のことを考えてもらいたいと切に願うのである。

「何もない」と学生が思うようにしたのは誰だ

ここでB教授は「自分は大学の一構成員として」という言い方をされているが、B教授は大学当局の一員であって、学生と同列のような印象を受ける言葉を使ってほしくない。

広島大学は、大学自治の形を狭義の民主主義（教授会自治）でとっている。であるからこそ「学生生活に関する規程」が学生を無視した形（私は少なくともそう思う）で制定されたわけである。

また、西条への広島大学統合移転も、学生の関与すること無く決定され、東広島市の誘致でもなく移転が決定された（これはB教授が文中で認めている）。つまり、大学当局が無理矢理に移転を決定したといっても過言ではない。

しかし、当局は、東広島市にも広大生にも「バラ色の夢」を見せ、「開かれた大学」という美辞麗句を言い聞かせながら、大学当局自身が「バラ色の夢」を追いかけたかったのではあるまいか。

夢を目標として「現実の厳しさ」を乗り越えられるように努力や働きかけをしてこそ、「バラ色の夢」を「バラ色の現実」に変えていけるだろうが、当局自身は「バラ色の夢」が「現実の厳しさ」に変わったことを知ったにもかかわらず、広大生や東広島市・市民に「バラ色の夢」を見せ続けた結果として、広大の移転は無計画で無秩序なものとなっていったのではないのか。

教授会自治という学生の入る余地のない意志決定で、当局が移転について全責任を追うべき立場にあったにもかかわらず、無為無策に移転してしまったことは、当局側に自覚してもらいたい。

こうした広大統合移転は、一九八五年完了予定を一九九五年という、なんと十年も遅れた今成し得たのである。たいへんもっておめでたいことである。その間に当局が夢を見せ続けた代償とは、学生に与えた影響や、さらに重大なのは、東広島市という行政および地域社会を混乱に陥れたということである。

ここ二～三年の下宿供給の不安定さや、「下見学生街」が統合移転完了の今も影も形も見えないのは、大学の移転計画に確実なビジョンが見えず、行政としても地域社会としてもその対応が予測できなかったからであると思う。

ここで結論を述べよう。

「何もない」と学生に思われるようにしたのは、まず、いつ来るか全く分からない広島大学につきっきりでは面倒を見きれない東広島市・東広島市民ではない。そして、移転について全く関与できなかった学生にはどうしようもできなかった。

この二者でない以上、つまり、この事情にかかわる三者（市・市民、学生、大学当局）の中で唯一その実行者たる「大学当局」が、「西条は何も無い所」にしてしまった（と学生に思わせている）張本人なのである。

ここで、大学が言う「開かれた大学」について批判したい。門がないから「開かれた大学」であるのではなく、学部展示を行うことでもない。日常の生活のなかに関わるという意味で、大学と市民の関係は、学生と市民の間よりも希薄であり「開かれ」ていないと感じるのである。車止めを多用し、車椅子の人への配慮すらしていないと思われることをしていて、何が「開かれた大学」か。

そうしたことをB教授はご存じだろうか。当局の人間であるB教授がそのような経緯を知らないということが、広大を動かす建前上唯一の自治機構である教授会の一員であるB教授の怠慢であるし、知っているのであれば、自己の責任を放棄した発言を繰り返していることを自覚したうえで、反省をしていただきたい。

今年入った経済学部の新入生に、「西条にきてまずどう思った？」と聞くと、こう答えが帰ってきた。「試験も入学手続きも千田ですませて、アパートを借りにJRで西条に来てみたら『だまされた』と思った」。

このように彼（に限らずそう思う全学生）に思わせた当局の責任は重い。

Ⅳ 追求および提言

Ⅲ章でB教授の意見への意見・反論を展開したが、このような意識はかなり多くの大学当局者の意識であるとも言え、B教授一人への反論であると同時に、こうした考え方をもつ全ての大学当局者に向けた反論・意見なのだ。

今、「バラ色の夢」を見せ続けた当局のつけが、学生生活や東広島市の環境整備に押しつけられつつある。Ⅲ章であげたような姿勢が大学当局のなかにみられると思われている以上、自己反省を強く求め、「バラ色の夢」を「現実の厳しさ」に終わらせるのではなく、当局の責任として『バラ色の現実』と変えるべく努力して欲しいと思う。

最近の当局の流れは、「今までの流れがあってしょうがない」といった無気力な対応が目に余る。こうした姿勢自体を変え、大学当局として、広島大学をそのまわりの環境を含めてどのような環境にしたいかといった明確なビジョンを持って、地域社会・学生と一体となった真の「開かれた大学」となるべく努力をしていく必要があるのではないか。「ようやく統合移転が完了し、地域社会と協力して真の総合大学をつくりあげていこうとしている時点」とB教授も認識しているのだから。

また、私を含め学生も、西条にある大学、西条に生活する大学生として、人と人が生活するうえでのルールを守り、そして「何もない」んだからと無気力に過ごしたり、『広島に行けばいいや』と思うのではなく、西条を自分たちに同化させるくらいにもっとアクションを起こして

名誉教授だより

氏名のローマ字綴りのこと

広島大学名誉教授 ❖ 奥 田 九一郎

ローマ字名を変えたのは

先般アメリカのある専門誌に広島大学歯学部時代に行った研究の一部を総説としてまとめて発表した。ところでその総説に，私は自分の名をKyu-Ichiro Okudaと綴り，略名をK. -I. Okudaとした。別冊を知人に贈ったところ，ローマ字名をなぜ変えたのかという問い合わせが何人からか寄せられた。

一人ひとりに返事を出してもよいのだが，このことは日本人全体の問題でもあるので，ここにその理由を記して皆さんの意見を聞きたいと思う。

私の考えた表記方法

従来私は，ローマ字ではKyuichiro Okudaと綴り，略名はK. Okudaとしてきた。[middle name (Christian name)を持たない日本人はこのように綴るのが習慣であったし，こう綴るように教えられてきた。]

しかし，この著者名でMedicus IndexやChemical Abstractなどの二次資料を検索すると（索引は名の頭文字と苗字で分類されている），同じ綴りの名前がたくさん出てきて，それらをいちいち調べるためには重い本（これらの2次資料は一般に分厚くて重い。）を何度も出し入れしなければならず，たいへん時間と労力のいる仕事であることが分かった。

だからといって，コンピュータを使って著者名でサーチしてみると，関係のない論文が多数引っかかってきて，それらを一々ファイルを開いてチェックすることは，今度はたいへんな時間のロスであることが分かった。しかし，名の頭文字が2ないしは3ある著者の場合は重複がきわめて少なく，こんな苦労をする必要がないことが分かった。

そこで，他の研究者に迷惑をかけないためには，名の方の頭文字を2ないしは3にするのがよいのではないか，と考えた次第である。日本の科学者（科学者以外でも同じだが）が皆このようにすれば，どんなに関係者の時間や労力の無駄が省かれるか知れない。

適切な自分のローマ字名を選択するべきだ

著者名は一度発表してからは変えない方がよい。したがって，最初の論文を欧文で発表するときに，よく考えて発表するべきである。[私自身は啓蒙のためにと思って変えたのであるが，今ではKyu-Ichi-Ro (K-I-R. Okuda)とすればよかったと思っている（名の各語の頭文字を大文字で表す）。]

名が，こ(子)とかお(夫，男，雄)などのように普遍的に多い語の場合は，例えば，良子をY-s-K.，幸夫をY-k-O.というように，名の最初の字の綴り内の一文字を小文字で挿入すればどうだろうか。従来どおりだと，鈴木良子も鈴木幸夫もY. Suzukiになってしまい，略名からいずれかの人を特定することはできない。しかしこの綴り方だと，Y-s-K. SuzukiおよびY-k-O. Suzukiとなり区別できる。

日本人の活動が国際的に広がっていっている今日，日本人は従来のローマ字綴りの習慣をやめて，世界の人々にとって便利な綴り方に変えるべきではなかろうか。幸い，氏名のローマ字綴りは戸籍には記載されないから，自由に選ぶことができる。

これから欧文論文を書こうとする人は，よく考えて，適切な自分のローマ字名を選択するべきではないかと考えている。

（おくだ・くいちろう）

V 付記

いこう。行動を起こすことで何か変わるはずである。それこそA氏が言わんとするところでもあるのだから。

東広島市の皆さん、読んでくださってありがとうございます。私は、この論争で、大学当局の自分の責任を棚上げにしたこのような言い方に憤りを覚え筆を執りましたが、この論争に触れる以上、「何もない」という引用が多く気分を害されたことと思います。誠に申し訳ありません。しかし、大学内の問題以上の問題になってしまったため、「広大フォーラム」の場を借り、広大生の一人として私の偽らざる気持ちを書いたつもりです。

これからも今まで以上に広大に温かいご支援や目を持っていただけたらとてもうれしいです。

＊この原稿を書くにあたり次の文章を参考にした。

「広大フォーラム」二十六期八号十六頁「アホにならないで」A氏

「広大フォーラム」二十七期一号三十一頁「『西条は何も無い所』か」B教授

「教職員・学生の生活環境について答申」昭和五十一年十一月 広島大学統合移転・改革に関する基本計画委員会・生活環境専門委員会

＊なるべく文中に差別用語をださないよう注意したつもりですが、注意できていなかった部分があったらこの場を借りて謝罪します。

A氏の「アホ」「ハンディキャップ」「毎日ボーッとして過ごすのはアホのすること」またB氏の連発する「無神経」という言葉は気になりました。

私も最近注意しはじめたことで大きなことは言えませんが、公のメディアでは日常生活以上に敏感に気をつけていきたいと思いますし、そのことを知っていただきたいと思います。

また、拙論を展開した以上、さまざまな方からの反論や賛同の意見は受け付けたいと思います。

（たにみつ・あきひこ）